

プレア・カンのピラスターに表された図像の配置構成

日本学術振興会特別研究員 PD
久保真紀子

はじめに

ジャヤヴァルマン7世（在位西暦1181～1218年頃）によって12世紀後半に建造された仏教寺院プレア・カンでは、4面それぞれに72節もの長大なサンスクリット語碑文（K.908）が刻まれた石柱、いわゆる「石柱碑文」が発見されている¹⁾。この碑文の特筆すべき点として、プレア・カンの寺院創建時に特定の尊像が特定の場所に安置されたことを示す一連の記述が挙げられる（図1）²⁾。寺院伽藍全体の尊像配置に関する記述はこの石柱碑文に特有のものであり、建造者ジャヤヴァルマン7世の寺院建造意図を探るための貴重な資料として位置づけることができる。

筆者はこれまでの研究で、プレア・カンが創建された当時、この石柱碑文に記述された尊像配

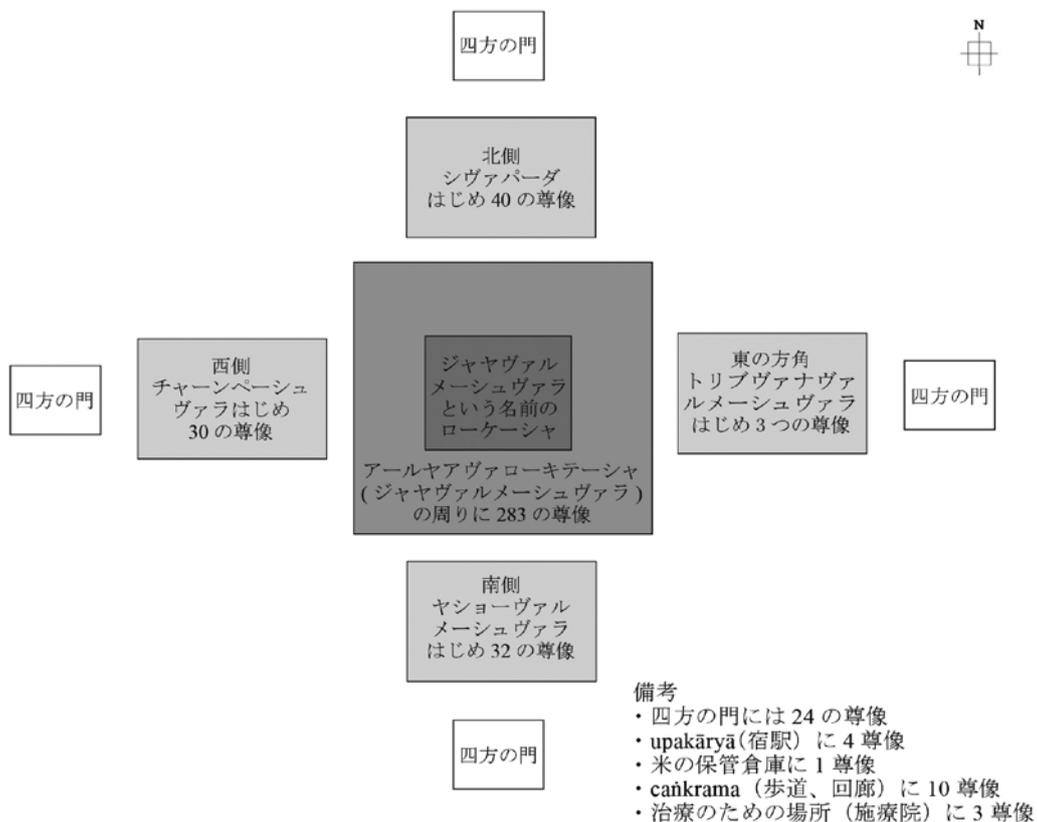


図1 石柱碑文に記された尊像配置

- 1) この碑文には、プレア・カンの中央主祠堂に本尊を安置した年代（1191年もしくは1192年）が記載されていることから、「プレア・カン創建碑文」とも呼ばれる（Maxwell 2007: 2,13; 久保 2016: 154）。
- 2) 石柱碑文第34～40偈（Cœdès 1941; Maxwell 2007）。これらの記述内容については、拙稿（久保 2014: 57-59）を参照されたい。

置が実際の寺院建築においてどのように具現化されたのかを明らかにするため、碑文の記述内容と、伽藍で確認された諸資料との整合性を検証した³⁾。伽藍を構成する諸施設に安置された彫像の尊格を類推し、その配置を明らかにするための資料としては、寺域で発見された丸彫像（図2）や台座（図3）、出入口枠に刻まれた古クメール語の短い碑文（図4）（以下、「出入口枠碑文」とする）がある。ところが発見された丸彫像はごくわずかである上に、破損しているものが多く、しかも当初の安置場所を特定することは難しい。また出入口枠碑文は施設内に祀られた尊像名や奉納者名等が記された有用な資料であるものの、実際に碑文が残る出入口はごく一部に限られており、寺院伽藍の尊像配置の全体像を捉えることは難しい。一方、各施設の出入口を構成する部材に施された浮彫（図5）（以下、「出入口装飾」）は比較的損傷が少なく、建造された当初の位置に現存するものが多い。そこでこの出入口に浮彫された図像表現から施設内に安置されていたであろう尊像を類推し、それらを整理することで、実際の寺院伽藍における尊像の配置傾向と、石柱碑文に示された尊像配置との間に一定の整合性が見られることを確認した。

本稿では、出入口構成部材の中でも、出入口枠の左右に對に配されたピラスターに施された浮彫に焦点を当てる。これまでに発表したペディメントやリントルを考察対象とした拙稿⁴⁾と同様、本稿におけるピラスターに施された浮彫の分析もまた、筆者の博士論文⁵⁾、およびその後の補足調査に基づいている。クメール寺院建築における出入口は、ペディメント、リントル、ピラスター、および出入口枠といった部材からなり（図6）、各部材には、動物や植物をモチーフにした文様や、ヒンドゥー教の神話や叙事詩ならびに仏教説話を題材とした浮彫が施されている。



図2 プレア・カンで発見された丸彫像（写真提供：フランス極東学院）



図3 施設内に残る台座（プレア・カン、西側副次的伽藍）



図4 出入口枠碑文（プレア・カン、西側副次的伽藍）



図5 出入口装飾（プレア・カン、北側副次的伽藍）

3) 久保 2013; 2014; 2015; 2016

4) 久保 2014; 2015; 2016; 2018

5) 久保 2013

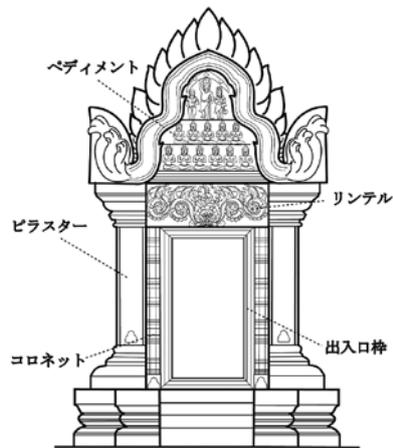


図6 出入口構成部材

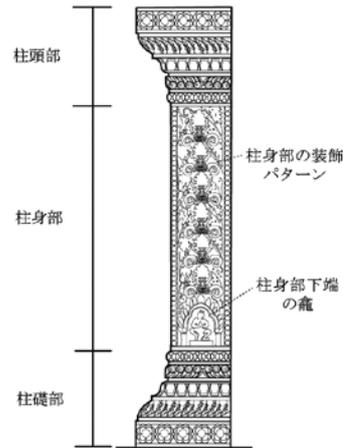


図7 ピラスターの構成

1. ピラスターの浮彫

ピラスターに施された浮彫

クメール寺院建築におけるピラスターは、出入口の両側でコロネットと並んで設置されて、出入口上部のベディメントを支えており（図6）、柱を模した造形として壁面から前方に張り出して表現されている。ほとんどの場合は砂岩で造られ、柱頭部、柱身部、および柱礎部の3つに区分できる（図7）。柱頭部と柱礎部にはそれぞれ3段から5段の線型が施され、各線型には多弁花文様や葉文様等の連続文様が刻まれている。柱身部には、下端に三葉形アーチに囲まれた龕が配され、その上には葉状龕や渦巻文様からなる装飾パターンが浮彫されている。柱身部下端の龕やその上部に連続している葉状龕の内側には、尊像や人物像が浮彫されている。プレア・カンでは、ピラスター柱身部下端の龕内に表された主な図像として、禪定印仏坐像、行者坐像、および踊子像の3つの類型が確認できる。以下に、3つの類型の図像的特徴を概説する。

禪定印仏坐像

禪定印仏坐像は、仏陀が樹下で瞑想する姿を表しており、右脚を左脚の上に重ねたいわゆる半跏趺坐の姿勢をとり、手元を禪定印に結び、両眼を閉じて瞑想している（図8）。左肩を大衣で覆い、右肩を露出している。プレア・カンの寺院伽藍全体を見ても、柱身部に残存状態の良好な禪定印仏坐像が確認できるピラスターはわずか数カ所に限られる。その他、当初浮彫されていた禪定印仏坐像が、後に人為的に破壊されたり、植物文様⁶⁾のような形に改変されたりしたものが多数見られる（図9）。その多くは、仏坐像の身体の一部、例えば胴部や脚部の形状を生かしながら改変されており、当初はそこに仏陀坐像が表されていたことを容易に類推できるものが多い。

6) 龕内に刻まれた植物文様の中には、禪定印仏坐像から改変されたのではなく、当初から植物文様として表現されていたと見受けられるものが少数確認できる。これらの浮彫は、とくに第1周壁内の小規模な祠堂群に見られる。これらの浮彫における改変の有無を明確に示すことは難しいため、本稿の類型には含めず、付図においてのみ、その配置場所を示すことにしたい。



図8 禅定印仏坐像
(プレア・カン、第1周壁南塔門)



図9 変更された禅定印仏坐像
(プレア・カン、第1周壁内祠堂)



図10 行者坐像
(プレア・カン、第3周壁西塔門)

行者坐像

行者坐像は、サンスクリット語でリシ (R̥ṣi) と呼ばれる聖者や聖仙の姿を表したものである(図10)⁷⁾。顎鬚を長く伸ばし、髪を頭頂部で結び上げ、髻や首元および両腕には連珠状の装身具を付け、両耳にも大きな垂飾りを付けている。腰には短い裙をまとい、上半身を露出した姿で坐し、両手を合掌している。また、行者坐像は膝を立てて両足首を交差させて坐す姿勢で表されるが、9世紀のクメール寺院建築で確認できる行者坐像の中には、両脚が太い带状の布(ベルト)で結ばれているものがある⁸⁾(図11)。これは、ヨーガパッタ (yoga-patta) と呼ばれ、ヒンドゥー教の行者が修行中に身体を固定して姿勢を安定させ瞑想するために用いられる⁹⁾。例えば、南インドのタミル・ナードゥ州、カーンチープラムで8世紀に建造されたカイレーサナータ寺院の壁面には、両脚をヨーガパッタで固定し修行するシヴァ坐像(図12)が浮彫されている。一方、管見の限り、プレア・カンを含むジャヤヴァルマン7世建造の寺院建築に見られる行者坐像に、ヨーガパッタが表されているものは1例もなく、いずれも両脚をただ交差させて坐す姿で表されている。すなわち、9世紀のクメール美術の行者坐像には、8世紀の南インドの修行する行者坐像と共通する図像的特徴が認められるが、12世紀後半のクメール美術の行者坐像にはその特徴は見られない。このヨーガパッタを表現しない行者坐像は、南インド美術からの影響を受けて成立した表現がクメール美術の様式変遷の中で変容した図像表現といえるかもしれない。ただし、この図像表現の成立過程については、南インドの諸王朝とアンコール朝との文化交流史の観点から詳しく検討する必要があるほか、チャムやジャワ等、東南アジアの他地域の美術とも比較する必要があると、今後の課題としたい。本稿ではあくまでも行者坐像の図像表現を理解するに留めて論

7) リシは、本来ヴェーダの言葉が啓示された詩人のことをいい、一般的には修行の結果、宗教的に高い心境に達した者をいう。

8) 例として、プレア・コー(シムリアップ州、西暦879年)で発見された丸彫の行者坐像(ブノンベン国立博物館、Ka.1643)、プラサート・コック・ポー(シムリアップ州、9世紀)のリンテル(ギメ国立東洋美術館、MG18217)が挙げられる。

9) Rao 1914: 287-289



図11 ヨーガパッタを巻いた行者坐像（プラサート・コック・ポー、ギメ国立東洋美術館所蔵リントルの細部）



図12 ヨーガパッタを巻いたシヴァ坐像（インド、タミル・ナードゥ州カーンチープラム、カイラーサナータ寺院、壁面浮彫）



図13 踊子像（プレア・カン、第2周壁と第3周壁の間の広間）

を進める。

踊子像

踊子像は、華奢な女性が片足を高く挙げて両手を動かしながら軽快にステップを踏み踊る姿で表される。腰に裙をまとい、その裙を長く垂らし、頭部に多くの装身具を付けて華やかに装っている（図13）。

2. ピラスターの図像の配置傾向

プレア・カンのピラスターに浮彫された上記3つの図像の配置には、どのような傾向があるのだろうか。寺院伽藍の諸施設に不規則に配置されたのか、それとも何らかの規則に基づく配置傾向が読み取れるのか。以下では、プレア・カンの寺院伽藍を区域ごと、あるいは施設ごとに見てゆき、ピラスター柱身部に浮彫された3つの図像の配置傾向を整理する。さらに、ピラスターに表された図像が、同じく出入口構成部材であるペディメントやリントルに表された浮彫図像とどのような関係性があるのか考察する。

以下では、プレア・カンの伽藍全体を、「伽藍中央部」（第1周壁とその内側の諸施設）、「伽藍東側」（第2周壁東塔門と第3周壁東塔門）、「伽藍南側」（第3周壁南塔門と第3周壁内南側副次的伽藍）、「伽藍西側」（第3周壁西塔門と第3周壁内西側副次的伽藍）、「伽藍北側」（第3周壁北塔門と第3周壁内北側副次的伽藍）、「外周部」（第4周壁の4つの塔門）の6つの区域に分けて、ピラスター柱身部に浮彫された図像の主題と配置を整理する。

伽藍中央部では、浮彫を確認できたピラスターのほとんどに、残存状況の良好な禅定印仏坐像、あるいは当初浮彫されていた禅定印仏坐像が破壊されたり改変されたりした痕跡が見られる（付図1）。この状況から、プレア・カンが建造された当初、この区域のピラスターの大半に禅定印仏坐像が浮彫されていたことが推察される。

伽藍東側については、第2周壁東塔門および第3周壁東塔門と、その間に位置する、いわゆる

「踊子の間」と呼ばれる広間に分けてみていく。まず第2周壁東塔門では、部材の崩落した出入口が大半で、残存している部材についても浮彫の残存状況が悪く、主題を確認できる浮彫は僅かである¹⁰⁾。そのうち1カ所の出入口において、ピラスター柱身部に浮彫された葉状龕の内側が削り取られ、その痕跡から当初は禪定印仏坐像が浮彫されていたことが類推される(付図2)。第3周壁東塔門では、4カ所のピラスターに行者坐像、1カ所のピラスターに踊子像が見られるが、その他多くのピラスターに禪定印仏坐像あるいはそれが改変された痕跡が見られ、この塔門全体として3つの図像が混在する状況がうかがえる(付図3)。一方、第2周壁東塔門と第3周壁東塔門の間にある広間の出入口では、ピラスター柱身部の葉状龕内に刻まれた浮彫が削り取られている。その中でも、踊子像は削り取られずに残っている(付図2)。この広間では、他にも室内のフリーズや支柱側面に多くの踊子像が浮彫されており、この施設が「踊子の間」と呼ばれる所以を物語っている。

伽藍南側では、第3周壁南塔門ならびに南側副次的伽藍ともに、施設の残存状況が極めて悪く、出入口付近に崩落した石材によってピラスター柱身部の浮彫を確認できない個所が多い。確認できたわずかなピラスターには、いずれも禪定印仏坐像あるいはそれが削り取られた痕跡が見られる(付図4、5)。

伽藍西側では、第3周壁西塔門と西側副次的伽藍ともに、大半の出入口において行者坐像を浮彫したピラスターが確認できる(付図6、7)。ただし、第3周壁西塔門の1カ所の出入口では、行者坐像と踊子像の他、数体の神像が柱身部の葉状龕内に浮彫されたピラスターが見られる。

伽藍北側では、大半の出入口において、行者坐像を浮彫したピラスターが見られる(付図8、9)。ただし、第3周壁北塔門の2カ所のピラスターには踊子像が見られ、北側副次的伽藍の1カ所の出入口では、ピラスター柱身部に行者坐像と踊子像を浮彫した葉状龕が見られる。

外周部は、第4周壁の東塔門、南塔門、および西塔門のいくつかの出入口で、ピラスター柱身部に踊子像あるいは禪定印仏坐像が削り取られたり改変されたりした痕跡が見られる(付図10～12)。北塔門では、すべてのピラスターで龕内の浮彫が破壊されているが、1カ所だけ、当初浮彫されていた禪定印仏坐像が類推できるものがある(付図13)。また、第3周壁東塔門と第4周壁東塔門の間にあるいわゆる「ダルマシャーラー(宿駅)」と呼ばれる施設では、東側前室の出入口のピラスターに踊子像が確認できる(付図14)。

以上、プレア・カンのピラスター柱身部に表された図像を区域別に整理した結果、いずれの区域においても、各施設に共通する図像が表されていることが分かった。例えば、伽藍中央部や伽藍南側では禪定印仏坐像、伽藍西側と伽藍北側では行者坐像が表されるという傾向が認められる(付図15)。この傾向から、ピラスター柱身部に浮彫された図像は無造作に選定されたのではなく、伽藍全体を見渡した上で、区域によって意図的に配置された可能性が高いと推察される。

10) 第2周壁には、東塔門の他にも東面に6カ所、および南面と西面と北面にそれぞれ1カ所ずつ、1つの出入口からなる小さな門が設置されている。これらの出入口両側のピラスター柱身部には棍棒や三叉戟を持つ男性立像が浮彫されている。第2周壁、およびそこに設けられた東塔門以外の門は、プレア・カンの建造過程において最も遅い時期に建造された個所であり、それ以前に建造された個所を改築した痕跡も認められる。これらの施設については本稿では考察対象とせず、稿を改めて取り上げたい。

3. ペディメントとリンテルの浮彫

続いて、筆者のこれまでの研究成果をもとに、プレア・カンの伽藍全体におけるペディメントやリンテルに表された浮彫を概観し、ピラスターに表された浮彫と図像の配置傾向を比較する。

伽藍中央部のペディメントやリンテルには、総じて仏教図像が確認できる。中央主祠堂に残るリンテルには、浮彫が破壊されているものの、部分的に残存する輪郭から、当初観音菩薩立像が表現されていたことがうかがえるものがある。その周囲を取り囲む塔門や隅祠堂および回廊などのペディメントやリンテルには、観音菩薩立像や禅定印仏坐像の他、釈迦の生涯を物語る仏伝から「出家踰城」「剃髪」の場面を表す浮彫や、釈迦の前生における善行を物語るジャータカから「ヴェッサンタラ・ジャータカ」や「ムーガパッカ・ジャータカ」を主題とする浮彫が見られる。筆者は拙稿において、伽藍中央部のリンテルに浮彫された仏教図像の配置について、以下の点を指摘した¹¹⁾。中央主祠堂の出入口、ならびに中央主祠堂主室を中心に交差する南北軸上の出入口では、観音菩薩像を浮彫したリンテル（図14）が多く見られる他、ジャータカの場面を浮彫したリンテルも見られる。一方、2本の軸線から外れた場所に設けられた出入口には、禅定印仏坐像を浮彫したリンテル（付図16）が多く見られる。前述の石柱碑文の記述から、この寺院の中央主祠堂に祀られた本尊ローケーシャ（Lokēśa）は、観音菩薩、ジャヤヴァルマン7世の父親、およびジャヤヴァルマン7世自身という3つの特性が与えられていたことが分かる。中央主祠堂の周囲、なおかつ寺院参詣時に多くの人々が往来する2軸線上の出入口のリンテルに、この本尊と同じ観音菩薩像を表すことで、ジャヤヴァルマン7世は、この寺院が観音菩薩を中心とした仏教信仰の寺院であること、そして自らの支配の正統性を強調したのであろう。そして、2軸線上から外れた出入口のリンテルに浮彫された禅定印仏坐像は、中央主祠堂に祀られたローケーシャ、すなわち観音菩薩の周辺を装飾する図像として表されたと考えられる¹²⁾。



図14 観音菩薩立像
（プレア・カン、第1周壁東塔門）

さらに、第1周壁に囲まれた4つの敷地に立ち並ぶ小規模な祠堂群では、そのほとんどの出入口のリンテルに、禅定印仏坐像もしくはそれが削り取られた個所や、植物文様のような形状に改変された個所が認められる¹³⁾。以上から、伽藍中央部を構成する各施設では、総じて出入口に設置されたペディメントやリンテルに仏教図像が表されたことが分かる。

伽藍東側では、2つの塔門のペディメントとリンテルに仏教図像が確認できる。まず、第2周壁東塔門の出入口には、仏伝「乳粥供養」や「ブーリダッタ・ジャータカ」を主題としたペディメントやリンテルが見られる。第3周壁東塔門には、観音菩薩立像や般若波羅蜜多菩薩立像、禅

11) 久保 2015

12) 久保 2015: 37

13) これら第1周壁内の小規模な祠堂群は、第1周壁内側に取り付く列柱側廊や祠堂の壁面に残る増改築の痕跡、および出入口装飾の浮彫の様式的特徴から、プレア・カンの創建時期に建造されたものではなく、創建時期以降に建造されたと考えられる（久保 2015: 30）。

定印仏坐像、および「ヴェッサンタラ・ジャータカ」「プーリダッタ・ジャータカ」の場面を浮彫したリントルが見られる。一方、第2周壁東塔門と第3周壁東塔門の間にある広間では、ペディメントはほとんど崩落しており、踊子像や供養者像が浮彫されたペディメント片がわずかに残る程度である。リントルに関してはその多くが出入口に残っているものの、いずれも中央の葉状龕内に施された浮彫は削り取られており、その周囲に浮彫された植物文様や合掌する供養者像のみ残っている。

伽藍南側のうち南側副次的伽藍で主題を確認できた2点のリントルにはいずれも仏教図像が浮彫され、1つは禅定印仏坐像、もう1つは仏伝「降魔成道」の場面を表している。また、第3周壁南塔門で確認できた2つのリントルには、いずれもジャータカを主題とした浮彫が見られ、それらは「ムーガパッカ・ジャータカ」と「シヴィ・ジャータカ」の場面を表している。

伽藍西側では、西側副次的伽藍と第3周壁西塔門ともに、ヴィシュヌやその化身であるクリシュナやラーマの姿を浮彫したペディメントやリントルが多数見られる。例えば、「ガルダに乗るヴィシュヌ」「ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ」「ラーマとスグリーヴァの同盟」等の浮彫がある。

伽藍北側のうち北側副次的伽藍の中央祠堂には、シヴァを中心に表すヒンドゥー三神像のペディメントや、踊るシヴァ像を表すペディメントが見られる。一方、塔門や経蔵、隅祠堂といった中央祠堂を取り囲む施設の出入口には、ヴィシュヌやその化身の姿が浮彫されており、中央祠堂とその周辺の諸施設とで、シヴァとヴィシュヌの図像を意図的に配置していることがうかがえる。第3周壁北塔門では、行者坐像を浮彫したリントルがいくつか見られる他、クリシュナやラーマを表すハーフ・ペディメントが複数個所に確認できる。

外周部、つまり第4周壁の4つの塔門では、禅定印仏坐像を浮彫したリントルや、観音菩薩立像を浮彫したペディメントやリントル、そして戦闘場面を浮彫したペディメントが見られる。第3周壁と第4周壁の間にある施設では、東側前室および主室西面の出入口にペディメントとリントルが残っているが、いずれもペディメントの上段の浮彫が削り取られている。その痕跡から、当初は立像が浮彫されていたと推察されるが、主題を明確に判別することは難しい。下段には、合掌する供養者像が並ぶ。リントルに関しても、中央のカーラの頭上に設けられた葉状龕内側の浮彫が削り取られているため、当初の浮彫の主題は明らかではない。

4. ペディメントとリントルおよびピラスターに浮彫された図像の配置傾向の比較

ここまで、プレア・カンの寺院伽藍におけるピラスターに表された浮彫、ならびにペディメントやリントルに表された浮彫を区域別に見てきた。それぞれの配置傾向を模式化すると付図16と付図17のようになる。これら部材に表された浮彫の主題と配置を照合すると、各区域のペディメント、リントル、およびピラスターに表された浮彫の主題には、仏教やヒンドゥー教といった宗教上の枠組みにおいて一定の整合性が見られることがわかった。たとえば、伽藍中央部と伽藍南側は、ペディメントとリントルに仏教図像が表されるとともに、ピラスターには禅定印仏坐像が表されており、仏教信仰が表現された区域であったと考えられる。伽藍西側と伽藍北側は、ヴィシュヌやシヴァに関する図像が表されているとともに、ほぼすべてのピラスターに行者坐像が浮彫されており、ヒンドゥー教の信仰を表した区域であったと考えられる。

まとめに代えて

ペディメントとリンテルおよびピラスターに表された浮彫について、さらに細かく考察してみたい。ペディメントとリンテルに施される浮彫には、仏教の説話あるいはヒンドゥー教の神話や叙事詩にもとづく個別具体的な主題が選定されている。一方、ピラスターには、個別具体的な主題を持たない禪定印仏坐像や行者坐像といった図像が繰り返し表されている。

こうした部材による浮彫の違いは、ペディメントとリンテルの浮彫に込められた役割と、ピラスターの浮彫に込められた役割の違いとも換言できる。役割の違いが生じた要因として、各部材の配置場所の違いと彫刻面の広さの違いという2点が関係することを指摘したい。まず、ペディメントとリンテルは、どちらも出入口上部に設置される比較的大きな部材で、それらに施された浮彫は施設の外観を華やかに装飾し、出入口を往来する人々の注目を集める。併せて、両部材は他の部材と比べて広い彫刻面を持ち、浮彫を施すにあたって、主題となった情景や人物像を詳細に表現することができる。ジャヤヴァルマン7世は、ペディメントやリンテルにさまざまな主題を持った浮彫を施すことで、室内に安置されていた彫像の尊格を表象する装飾としての役割とともに、自身が信仰する仏教の世界観を表した。また、ヒンドゥー教の神話や叙事詩の情景を表現すると同時に、そこに登場する英雄の活躍ぶりを示すことで、隣国に占領されていた王都を奪還した自身の偉業を示し、アンコール朝の支配者としての正統性を確立しようとした¹⁴⁾。一方、ピラスターは、出入口枠左右に配された細長い部材で、その柱身部に設けられた彫刻面は非常に小さく、そこに神話や叙事詩の場面を詳細に表現することは難しい。また参拝者にとって、柱身部に施された植物文様や龕等によって構成された繊細な浮彫は、その前に立って注意深く観察しない限り、そこに表現された主題を識別することは難しい。こうした物理的な制約のもと、寺院を往来する人々の目に留まりやすく、なおかつ一見して主題を識別できるようにする手段として、ピラスター柱身部には仏教説話やヒンドゥー教の神話や叙事詩の場面等の複雑な主題を表現することを避け、仏教とヒンドゥー教との別を比較的識別しやすいアイコン的な図像を浮彫したと考えられる¹⁵⁾。プレア・カンではこうした配置場所や彫刻面の広さといった諸条件に応じて、各部材に浮彫する図像を選定したのであろう。さらに、ピラスター柱身部に浮彫された図像は、ペディメントやリンテルに浮彫された主題に呼応するように、仏教の区域では総じて禪定印仏坐像が表され、ヒンドゥー教の区域では、ヴィシュヌ信仰かシヴァ信仰かという区別に拘らず、総じて行者坐像が表された。これらピラスター柱身部に表された図像には、いわば寺院伽藍の各区域の信仰を示す記号のような役割が与えられていたといえよう。または、禪定印仏坐像と行者坐像のどちらも修行に専念する図像であることから、これらの浮彫によって、宗教に深く帰依し信仰を实践する模範的な信者の姿を示す目的も込められていたのかもしれない。

以上、プレア・カンの寺院伽藍を構成する各区域におけるペディメントとリンテル、およびピ

14) 拙稿では伽藍西側と伽藍北側のペディメントやリンテルに表されたクリシュナやラーマの浮彫には、ジャヤヴァルマン7世の雄姿を彼らの姿と重ね合わせようとした可能性があることを、浮彫の図像表現と碑文の記述内容とを照合させた結果として指摘した(久保2018)。

15) ジャヤヴァルマン7世統治期以前の12世紀前半に建造されたアンコール・ワットやバンテアイ・サムレ等の寺院では、プレア・カンとは異なり、柱身部に神話や叙事詩の場面を浮彫したピラスターが多数見られる。しかし、その図像表現はペディメントやリンテルに表された浮彫よりも単純化されている。

ラスターに表されたさまざまな図像の配置傾向からは、建造者ジャヤヴァルマン7世の宗教観や政治観が明確に読み取れる。本稿で焦点を当てたピラスター柱身部に施された浮彫をはじめとして、出入口装飾に表されたさまざまな図像には、それぞれ一定の意味や役割が与えられていたであろう。そして、部材どうしの関係性に配慮しつつ計画的に主題が選定された上で、各部材に浮彫が施されたと考えられる。本稿がプレア・カンを対象とした事例研究であることから、この寺院の浮彫装飾に見られる1つの特徴としてその可能性を提示することはできよう。今後、ジャヤヴァルマン7世統治期の他の寺院建築とも比較しながら、この特徴が同時期のさまざまな寺院に普遍的に見られるのかどうかを検証したい。

【謝辞】

本稿は、2015年7月にフランス・パリで開催された第15回ヨーロッパ東南アジア考古学会議大会（The 15th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists）での口頭発表と、2016年3月にカンボジア・シェムリアップで開催された文化庁平成28年度文化遺産国際協力拠点交流事業「東南アジア5カ国における文化遺産保存のための拠点交流事業」（通称メコンプロジェクト）での口頭発表ならびにその報告書をもとに加筆修正したものである。貴重な執筆の機会を与えてくださった石澤良昭先生に心より感謝申し上げます。また、本研究の調査は、日本学術振興会科学研究費補助金、高梨学術奨励基金、ならびにみずほ国際交流奨学財団の助成に基づき実施された。そして、調査では、カンボジア政府アプサラ機構、カンボジア国立博物館（プノンペン）、ならびにギメ国立東洋美術館（パリ）にご協力いただいた。ここに記して御礼申し上げます。

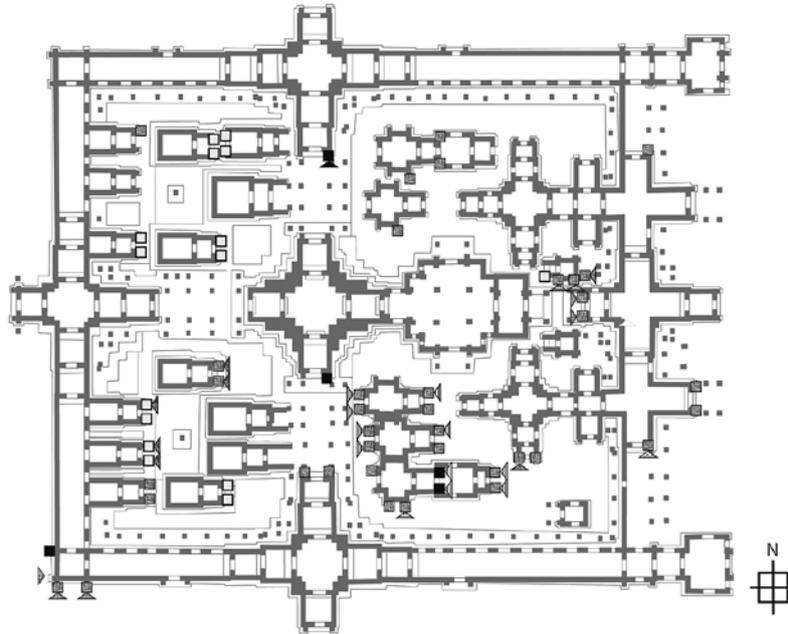
注：本稿の挿図ならびに付図のうち、注記のないものはすべて筆者自身が撮影・作成した。

【参考文献】

- Cœdès, George. 1941. "La stèle du Preah Khan d'Angkor," in *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 41(2) : 255-301.
- École française d'Extrême-Orient. 1914-1960. *Rapports de la Conservation d'Angkor, Preah Khan*.
- Hawixbrock, Christine. 1989. *L'iconographie du Prah Khan d'Angkor*. Paris: Mémoire dactylographié de DEA, Université de Paris III (Unpublished).
- Kubo, Makiko. 2017. "Religious Syncretism and Kingship of Jayavarman VII: an Analysis of the Decorative Bas-reliefs around the Doorways of Preah Khan, Angkor," 石澤良昭編『文化庁委託平成28年度文化遺産国際協力拠点交流事業 東南アジア5カ国における文化遺産保存のための拠点交流事業成果報告書』
- Maxwell, Thomas. S. 2007. "The Stele Inscription of Preah Khan, Angkor: Text with translation and Commentary," *UDAYA*.8, Phnom Penh: The Friends of Khmer Culture.
- Rao, T.A.Gopinatha. 1914. *Elements of Hindu Iconography*, vol.2, Pt.1, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Roveda, Vittorio. 2005. *Images of the Gods: Khmer mythology in Cambodia, Laos & Thailand*, Bangkok: Riverbooks.
- 久保真紀子. 2012. 「アンコールのプレア・カンにおける図像表現とその配置構成—出入口に施された装飾を中心に—」2012年度上智大学学位請求論文
- . 2014. 「アンコールのプレア・カン寺院における尊像配置とその意味—出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して—」『佛教藝術』337: 56-83
- . 2015. 「禪定印仏坐像の表現と配置構成—アンコールのプレア・カンの出入口に施された浮彫装飾を中心に—」

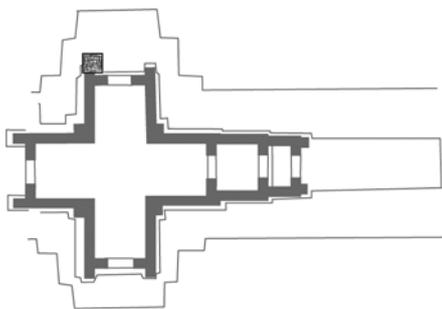
『東南アジア—歴史と文化』44:27-44

- . 2016. 「クメール寺院建築の尊像配置—プレア・カン寺院のリンテルに表現された禅定印仏坐像—」『カンボジアの文化復興』29:153-176
- . 2018. 「アンコールの仏教寺院プレアカンにおけるヒンドゥー教図像の解釈」『アジア仏教美術論集』中央公論美術出版（印刷中）



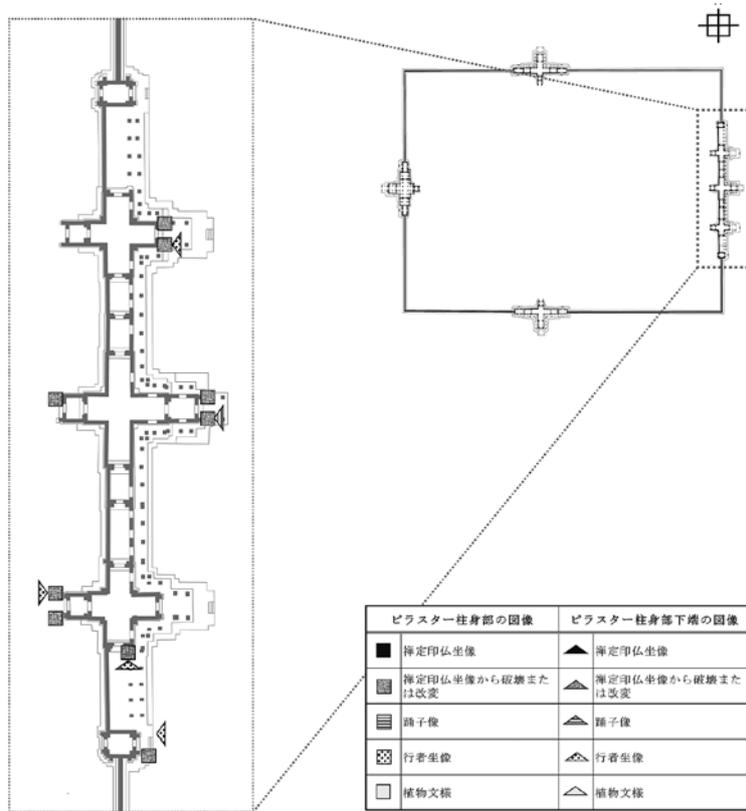
ピラスター柱身部の図像		ピラスター柱身部下端の図像	
■	禅定印仏坐像	▲	禅定印仏坐像
■	禅定印仏坐像から破壊または改変	▲	禅定印仏坐像から破壊または改変
■	踊子像	▲	踊子像
■	行者坐像	▲	行者坐像
■	植物文様	▲	植物文様

付図1 伽藍中央部のピラスターに見られる図像とその配置

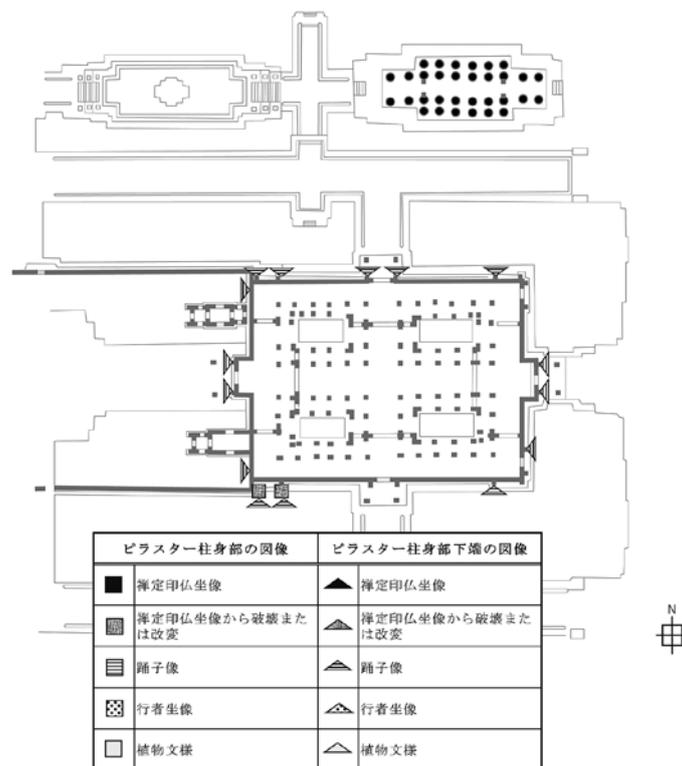


ピラスター柱身部の図像		ピラスター柱身部下端の図像	
■	禅定印仏坐像	▲	禅定印仏坐像
■	禅定印仏坐像から破壊または改変	▲	禅定印仏坐像から破壊または改変
■	踊子像	▲	踊子像
■	行者坐像	▲	行者坐像
■	植物文様	▲	植物文様

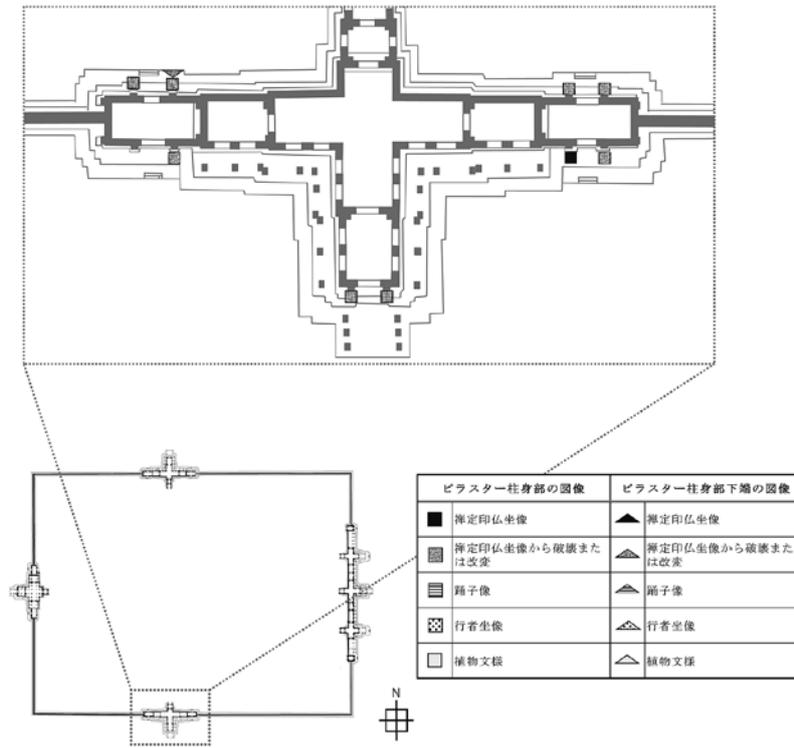
付図2 第2周壁東塔門のピラスターに見られる図像とその配置



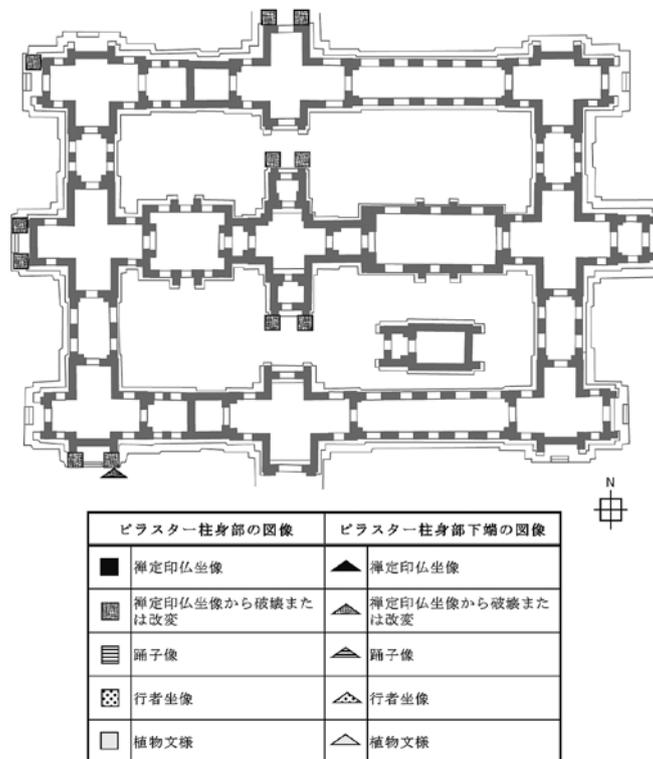
付図3 第3周壁東塔門のピラスターに見られる図像とその配置



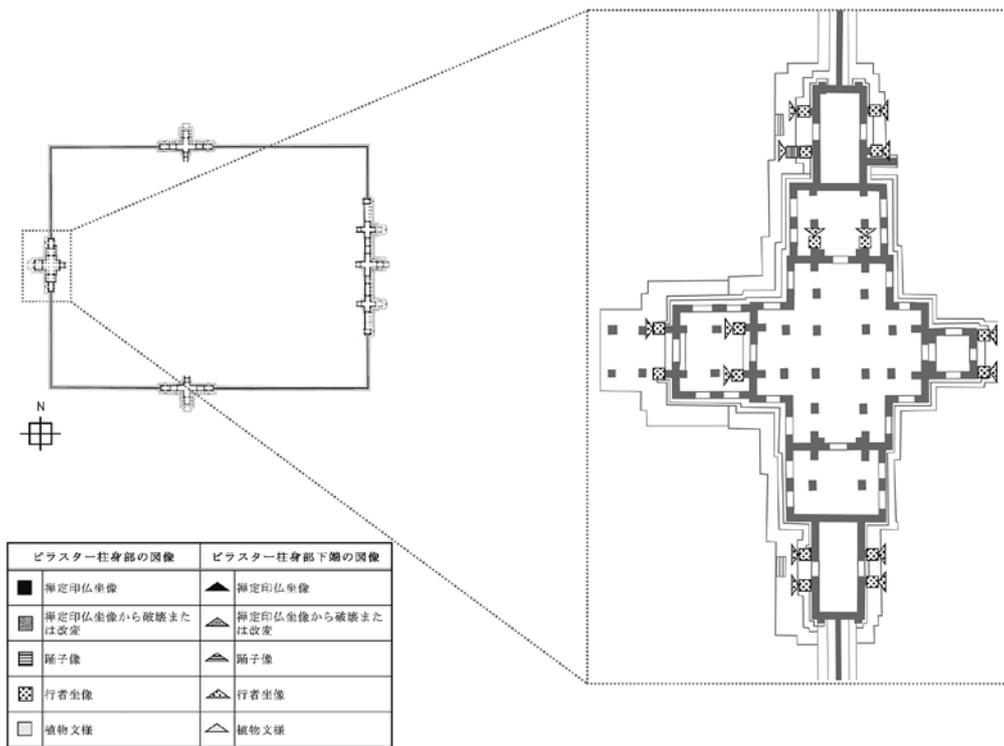
付図4 伽藍東側の広間のピラスターに見られる図像とその配置



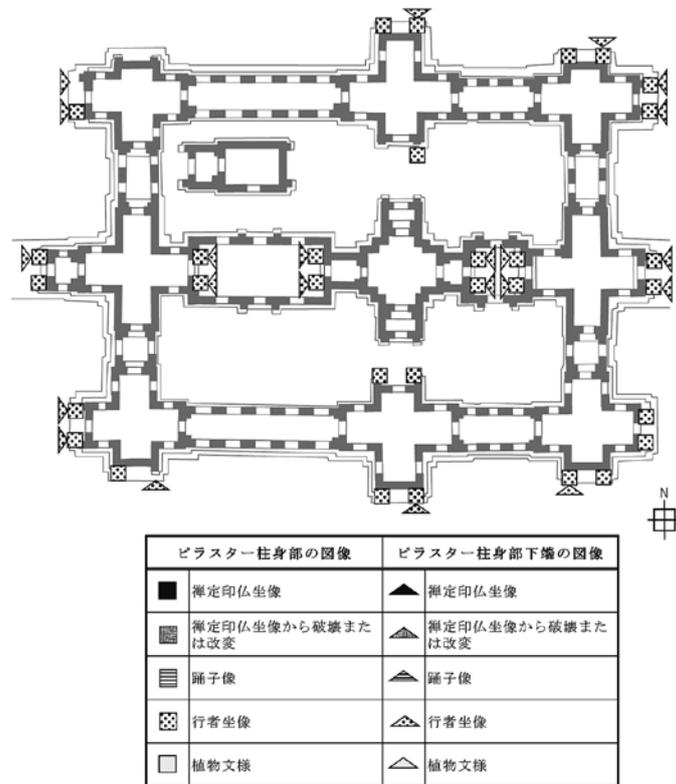
付図5 第3周壁南塔門のピラスターに見られる図像とその配置



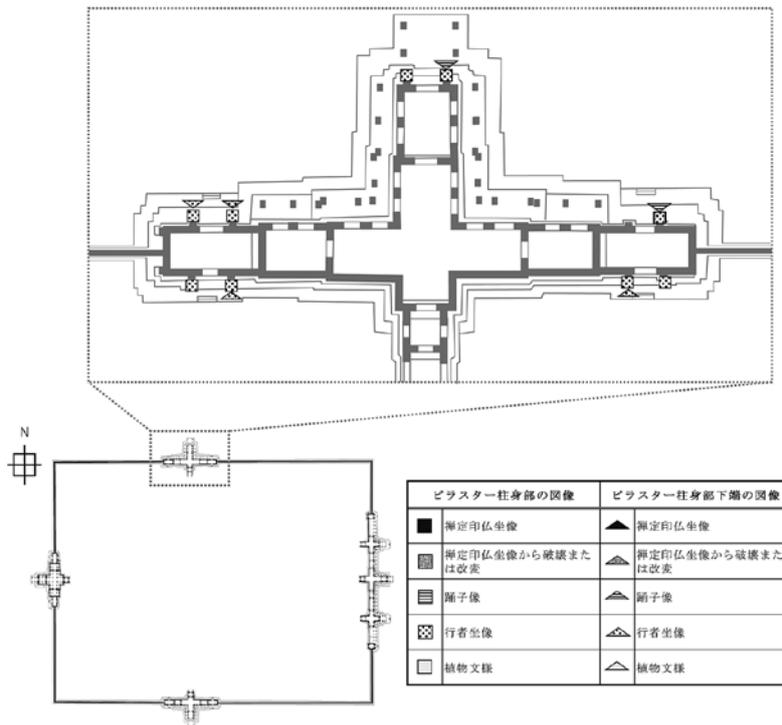
付図6 南側副次的伽藍のピラスターに見られる図像とその配置



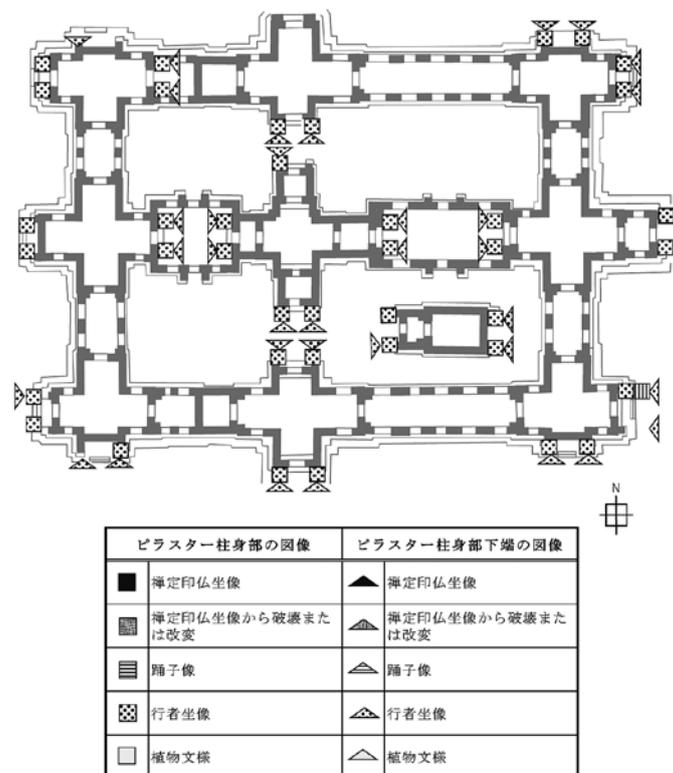
付図7 第3周壁西塔門のピラスターに見られる図像とその配置



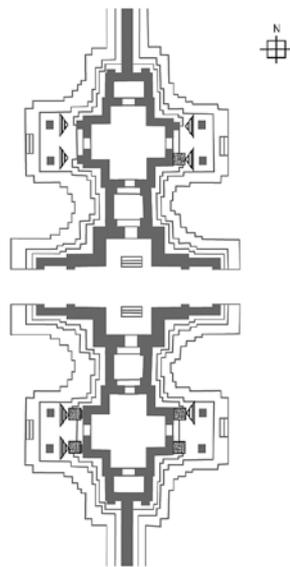
付図8 西側副次的伽藍のピラスターに見られる図像とその配置



付図9 第3周壁北塔門のピラスターに見られる図像とその配置

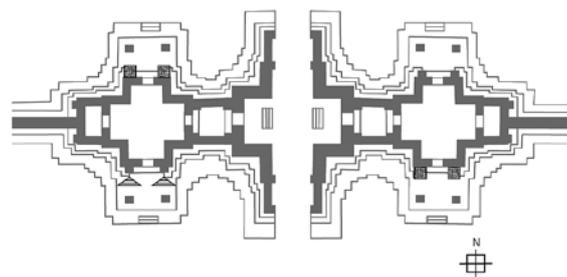


付図10 北側副次的伽藍のピラスターに見られる図像とその配置



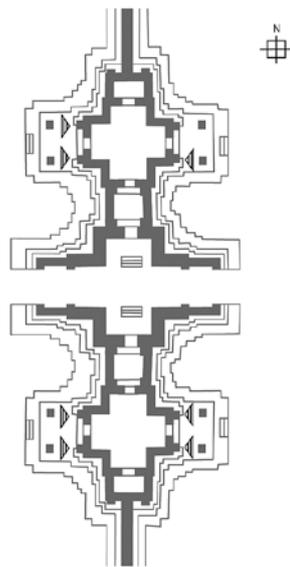
ピラスター柱身部の図像	ピラスター柱身下部の図像
■ 押定印仏坐像	▲ 押定印仏坐像
▣ 押定印仏坐像から破壊または改変	▣ 押定印仏坐像から破壊または改変
▨ 獅子像	▨ 獅子像
▩ 行者坐像	▩ 行者坐像
□ 植物文様	△ 植物文様

付図11 第4周壁東塔門のピラスターに見られる図像とその配置



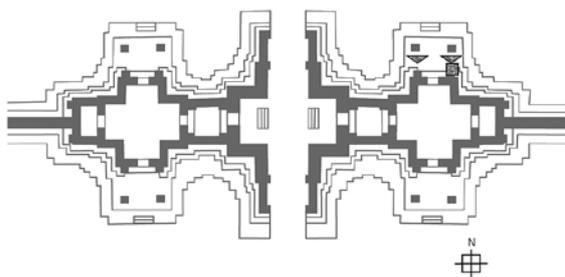
ピラスター柱身部の図像	ピラスター柱身下部の図像
■ 押定印仏坐像	▲ 押定印仏坐像
▣ 押定印仏坐像から破壊または改変	▣ 押定印仏坐像から破壊または改変
▨ 獅子像	▨ 獅子像
▩ 行者坐像	▩ 行者坐像
□ 植物文様	△ 植物文様

付図12 第4周壁南塔門のピラスターに見られる図像とその配置



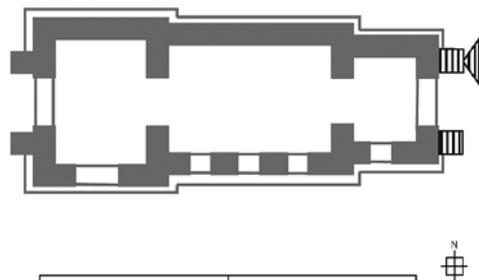
ピラスター柱身部の図像		ピラスター柱身部下端の図像	
■	禪定印仏坐像	▲	禪定印仏坐像
▣	禪定印仏坐像から破壊または改変	▲	禪定印仏坐像から破壊または改変
≡	獅子像	▲	獅子像
⊞	行者坐像	▲	行者坐像
□	植物文様	▲	植物文様

付図13 第4周壁西塔門のピラスターに見られる図像とその配置



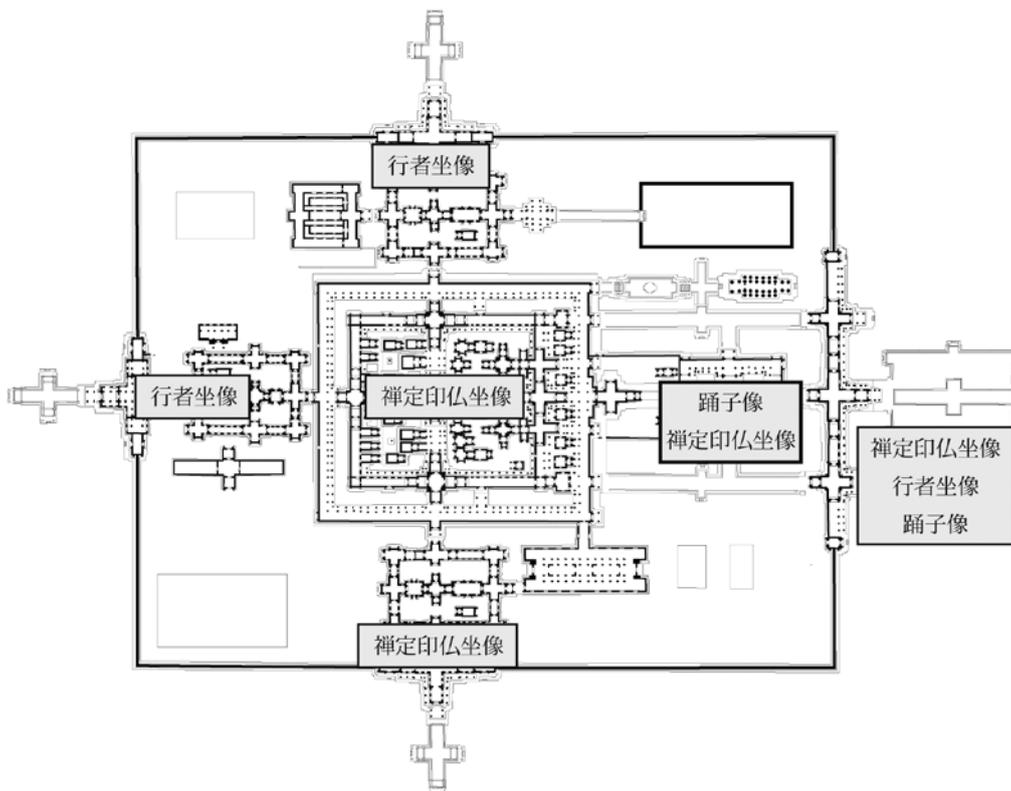
ピラスター柱身部の図像		ピラスター柱身部下端の図像	
■	禪定印仏坐像	▲	禪定印仏坐像
▣	禪定印仏坐像から破壊または改変	▲	禪定印仏坐像から破壊または改変
≡	獅子像	▲	獅子像
⊞	行者坐像	▲	行者坐像
□	植物文様	▲	植物文様

付図14 第4周壁北塔門のピラスターに見られる図像とその配置

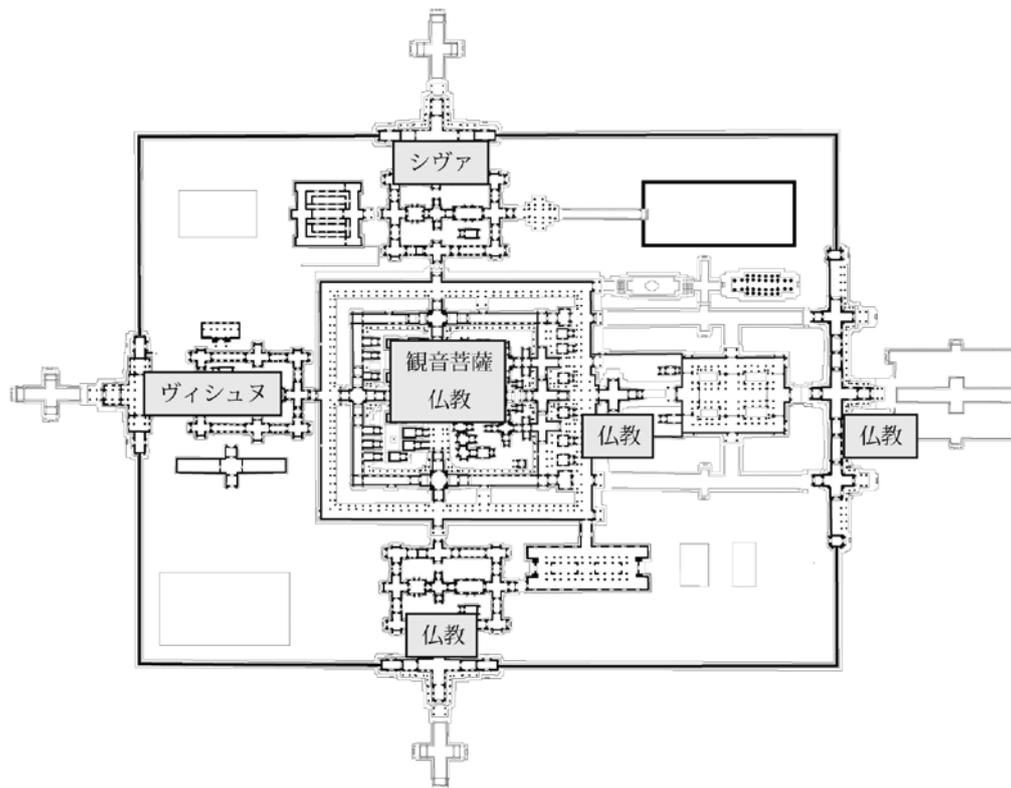


ピラスター柱身部の図像		ピラスター柱身部下端の図像	
■	禪定印仏坐像	▲	禪定印仏坐像
▣	禪定印仏坐像から破壊または改変	▲	禪定印仏坐像から破壊または改変
≡	獅子像	▲	獅子像
⊞	行者坐像	▲	行者坐像
□	植物文様	▲	植物文様

付図15 第4周壁内東側の施設のピラスターに見られる図像とその配置



付図16 ビラスターの図像配置



付図17 ペディメントとリンテルの図像配置